

英一は城壁の東側に何者かが掘った穴が枯れ枝などで隠匿されていたのを見つけ、それを辿ると城内の一室に達したのを確かめると奏美の元へ戻った。途中紹と常人がいた辺りを過ぎる時用心してその気配を探ったが、既に移動したのか何も聞こえたりはしてこなかった。奏美は幸いにして何も出くわすことなく隠れており、暫く休んだことで痛みも引いたらしくどうか立って歩けそうであった。英一は彼女を慮りながら連れ歩き、見つけた穴を指した。途上英一がどこか暗い表情をして迷いを抱いているのを奏美は洞察したらしく、優しく声を掛ける。

「英一くん、その穴を見つけるまでに何かあった？」

「え？ あー……その……」

「わたしで良ければ話してよ。辛いことって、一人で抱え込んでいると本当に嫌になるから」

こんな風な健気な態度を彼女が見せるのはやはりと云うか、少しでも英一の役に立ちたい、ただ守られているだけの存在であり続けたくないと云う心の表れであろうか。死んでいった小春がそう志していたところを垣間見、自らが残されているのならそれに劣るものに留まりたくないと言ふ負けん気でもあるかもしれない。繰り返ししなければ自らが環境に負けて腐り落ちて、いよいよただの屍になるのを待つばかりとなろうから。英一にはそう思われもしたが、同時にここまでの奏美の姿を思い起こす。幾つもの仲間の、友達の死に面して泣きはらし続けた優しく、弱い彼女。もう幾つもの苦しみを抱え込んだこの幼馴染に対してこれ以上陰鬱な話を打ち明けるなど、どうして当人のためになるだろう？ 英一はしかし奏美の追求にただはぐらかすのも悪く思い、ほんの一部だけを話した。

「いや、調べてる時、城の中で瑚潑と那於巴が話しているのが聞こえたんだよ。今の状況に愚痴ってた」

「そう？ それは確かに、他の人に聞かせられないこともあると思うけど……それだけ？」

「ああ、ちょっとあいつらの気分にてられただけさ」

全くの嘘を吐きたくなかったと云うのもある。そんな英一の取り繕いをどこか察したかの様に、奏美の瞳には懷疑が残っていた。……どうして、月子に懸かる自分たちの想像が裏付けられている様しか聞こえないやり取りを聞いたなどと言えるものか。英一はそう自己を正当化した。

潜り込んだ部屋は古びた寝台や棚と机の立ち並ぶ場所であり、クローゼットの一つを開くと使われていないままに放置された、すっかり古びたハウスメイドの服らしきものが見つかった。同様の構成をした部屋が幾つか鍵の開いているままに放置されていたのを英一たちは見ており、するとここなどは泊まり込みの使用人が使う寝室だったと云うことなのだろう。内側から掛けられていた鍵を外して廊下を覗き込んだが、誰もいない。速やかに合流した方がいいと云う考えもあったが、どうせ他の面々がどこにいてと云うこともまだ分からないことを思い、一応一通り調べてみることにした。

「他の部屋もそうだったけど、こう云う下働きの人の為の部屋だと流石にあんまりすごい発見は出来なさそうだよね」

奏美がこんな風に言いながら棚やら机やらを調べている。部屋の床に穴を開けてまで外に出ようとした者の意図は不明だが確かにこの様な部屋にあるものなど知れているかに思われるところだった。

「ん？」

英一が一つの寝台の下を覗き込むと、何かが転がっている。目を凝らすとそれは人骨だった。そう認識した途端に彼はぱっと飛び退いてその襲撃を警戒したが、特に何も起こらない。奏美がその音にやや怯えつつも英一を見た。

「どう……したの？」

「いや、ベッドの下に骨が」

「うっ……嫌だなあそう云うの」

だが余りに意味深長に過ぎると思うと英一には無視するのも考え物であると思われ、もう一度覗き込んだ。古びた服をまとった人骨は胸元で手を組まされているが、その手は何かを握っている様に思われた。英一は体を潜らせてそれを確かめた。暗いが故に分かりにくいだが、剣の柄を握っている。その剣は鞘に納まったままの様だ。彼は慎重に屍の指を柄から外して鞘ごと剣を寝台の下から取り出した。こう云う時、その骸骨が武器を渡すまいと襲って来るものだが。二人は経験的にそう考えたが、何も起こらなかった。英一は鞘から剣を抜き放つ。状態の良い両刃剣が光を受けて鈍く輝いていた。

「何だか……凄そうなものを見つけたね」

「ああ……重いけど」

「大丈夫？」

「まあ何とか運べるけど、鋸は中庭に置いて行った方が良さそうだな」

非力な奏美には鋸を振り回すのもしんどい話なので彼はそう言った。それを彼女は少し残念そうに聞いた。刈り取り鎌は累に渡していたので奏美は折れた角材を持っているだけだった。元のままならともかく今のこれはリーチも短く、どうにも頼りない。なるべくならより武器として期待出来るようなものを使いたいところだがと思うのも無理からぬところだった。

二人は改めて廊下に出て周囲を窺った。不気味な静けさが辺りを覆っている。だが下手に声を上げてさっきの化け物と呼び寄せるのも恐ろしい。英一は奏美を先導する様に廊下を進んで中庭へと戻った。中庭には一見誰もいないかに思われたが、二人の足音を聞いたのか時空間転移マシンの傍からひょっこり出して来た顔があった。

「るいちゃん！」

「あ……ああ、瀬之川先輩、それに葦杜先輩！　あの、坊之威って人が、あたしを逃がす為に囷になって……」

何てことだと、もう何度目とも知れぬ形でまた待みにしている相手とはぐれねばならなくなったのを英一や奏美は悔やんだ。せめて無事であれば良いのだが。

「しかし他の面々は……」

「分からないです。あたしは二階から飛び降りる様に指示されて降りたんですけど、その時にはここには誰もいなくて、暫く待ってもやっぱり誰も戻って来なかったの……」

こうなると次に何とすべきか……三人がそう頭を悩ませたところへ、おもむろに足音が近づいた。びくりと警戒する二人を庇う様に英一が立ってその相手を窺う。やって来たのは健だった。

「君たち、無事だったか！」

「あなたは……。月子、霧海さんたちは無事なんですか！？」

「すまない、三人ともはぐれる格好になってしまった。霧海さんは地下へ、後の二人は一階の東から南に逃げた様に思ったのだが……どちらも見つからなかった」

「そうですか……」

月子はともかく紹や常人と会って果たしてこれまで通りに接していられるものなのか英一には自信が無くなりつつあったものの、未だ生き残っている顔触れがいなくなっている方がやはり恐ろしいものではあった。英一は自分たちの状況を説明し、余剰した鋸を健に渡した。彼自身は登山用の杖らしきものを手にしていたが、鋸と云う工作道具は使えそうだと頷いていた。

「ありがたく使わせてもらうよ、葦杜君」

「いえ。それで、俺たちはどこか探るべきところがあるでしょうか？」

「さっきの話で鍵束を見つけたと言っておったかな。どこまで使えるものかは分かんが、三階の北側にある離宮の様な場所の扉は確か鍵が閉まっていた筈だ。ひよっとしたらそれで開けられるかもしれないぞ」

「なるほど」

「ただ、そろそろ日暮れが近い。ここの夜は危なっかしいから……」

彼の懸念は尤もであったが、さりとて離散した面々を放っておくのもいかなものかと思われる。それで日暮れまでは城内で誰かいないかを探すことにし、中庭に健が残って英一たち三人が一階・二階・三階を一回りしてくるようになった。そうしてまず中庭から西の廊下を目指したのだが、城門西の詰所から物音がしたのを三人は聞いた。顔を見合わせ、扉をゆっくりと開く。そこには壁を背にして座り込む京典の姿があった。

「多洪、お前、独りで地下を抜けて来たのか!？」

「何だ、葦杜先輩か。別に独りって訳じゃないですよ。ほら、登って来る……、？」

京典は開かれたままの地下への降り口から聞こえて来るべき音が聞こえてこないのを不審に思っ
て覗き込んだ。そこには誰もおらずただ真っ暗闇だけが続いており、どう云うことなのかと彼を困惑
させた。

「あの、多洪くん。誰が一緒だったの……？」

「甫土先輩ですよ。あと十慧先輩」

「なっ!？」

「？」

京典は何も知らないと言う顔をして首を傾げた。しかし侑人がと聞けば英一は殆ど食って掛かる様
な勢いで彼に詰め寄らざるを得なかった。

「お前、あの人と会ったのか!？」

「……どうしたんですか、そんな顔をして。先輩二人との間に何かあったんです？」

「いいか、よく聞けよ。十慧先輩は甫土先輩に殺されたんだ、俺の目の前で」

「……は？　なんで？」

「理由なんて本人に聞くしかない。それに俺はその直前にな、十慧先輩そっくりの化け物と出会っ
てるんだ。あの時は構っている場合じゃなかったけど、甫土先輩は恐らくそいつと行動を共にしてい
る」

「いや……でも、ぼくは確かに……」

「ああ、見たんだろうさ。甫土先輩は確かにあの通路に逃げ込んだから出会いもあるだろう。でもこ
の地下は地獄みたいところだ、正気ならそもそも潜っちゃいけない」

「じゃ、じゃあ……何で甫土先輩は僕をわざわざ案内してここまで通しておきながら、何で追って来
ないんですか……」

京典はもう一度地下通路への降り口を覗き込んだが、音一つ聞の内からは聞こえてこなかった。確
かなことではないが、英一相手には後ろめたさないし恐れが付き纏うだろう侑人であればその気配を
察して地下から出て来なかったのかもしれないと英一には思われた。

「その、多洪君。ここへ来て分からないことばかりだから混乱しているのはあたしたちも同じだから、
どうかこれだけは信じて欲しいの。十慧先輩は本当に……死んじゃったんだよ。葦杜先輩が冷たく
なったあの人を抱えてやって来て、わたしたちが埋葬したんだよ」

「……」

納得すればいいのかどうかも分からぬと云う様子で京典は沈黙していた。その表情にはどこかせめ
ぎ合いが見られた。森で繰り広げられた不和の為に彼は一度は侑人や初佳に失望を抱いていたが、再
会した折にはやけに余裕を取り戻した親切な態度だったことに内心不可解さを抱いていなかったとは
言えなかったのだ。しかしそれもあの地下通路を穏便に案内し通して貰えたところから一定程度評価
を改めたと云う矢先にこの様なことを伝えられて、一体どう納得を付ければよいものだろう？　そん
な彼の様子に英一はこれ以上あれこれ口を出してその思惟と懊悩を邪魔立て出来るものではなかつ
た。彼の生き残りを確認出来ただけでも幸いだと思うしかない。英一は隠し通路のレバーを操作して

これを塞いだ。これ以上妙なものが出て来てくれるなど思わずにはおかれず、通路のある床板の上に何か適当なものを置いて塞いでおくことにした。

京典のことを健に伝え、ここへ来て見ず知らずの他人を相手に任せると云う訳にも行かないことから累が京典と共に中庭に残った。英一は体力的に考えて運動部でもある累より奏美の方が残留するに妥当ではないかと考えたもののだが奏美は英一と離れたがらなかった。それを見た累が少し羨ましくも呆れた調子で自分が京典と共にいると言い出したことでまとまった。

「いや、……悪いな」

「いーんですよ先輩。あたしもお腹減ってきましたからね。一足先に休ませて貰えるんだって思っておきますから」

「……ぼくはダシに使われたくて君らと合流したつもりはないんだけど」

「まあまあ、こう云うこともあると思っておきなさい。こんなところに遭難した者同士、助け合わずに生き延びようなんて考えるものではないよ」

宥められて、不満はあるがそれ以上の選択肢もないが故に従う構えの京典は溜息を吐いて、じろりと英一を見上げた。

「……どうした？」

「ぼくは……色々言いましたが、前に葦杜先輩から缶詰を譲って貰った分の借りはありますからね。それを返すまでは先輩のことを信じてもいいと思っっています」

「……」

「こっ、……小春ちゃんのこととは今でも信じたいと思っと思っています。でもその……十慧先輩が埋められているところを見せられると、確かにここで見知った顔が死んで行っているんだと認めざるを得ないです」

「俺は……」

「謝ったりしないで下さい。ぼくは誰に対しても何も出来てないままにここまで来たんです。甫土先輩にさえですよ。ぼくはあの人があんな面倒見のいい人だったってことさえ今日まで知らなかったんです」

「甫土先輩はな……十慧先輩を諦められなかった果てにああなつたと云うか、こうして自分の好きな人を殺してしまったんだと思う」

「分かってますよ。嫌なもんだ。こんな悪夢みたいなこと、さっさと終わってしまえばいいのに」

奏美が英一を呼んだ。それで立ち話は打ち切りとなり英一は中庭を出た。……京典は『悪夢みたいなこと』と言った。悪夢。それはこれまで度々夢の間に現れたあの仮面の骸骨が口にした言葉の一つであった。ならばこれを悪夢と受け取るのは正しい理解と言って差し支えないのだろう。ただ一つ違うのは、それが現実になり代わっていること、それ故にここにある者らが死の淵へと引き摺り込まれようとしていることだった。あの仮面の骸骨は、ケタケタと嗤いながら英一に語り掛ける。他者の苦悶を自らの糧としているかの様に。それは憎しみを募らせるに十分と云えたが、英一は精々そうした自らの憤怒を態度に表さぬ様に気を払った。傍らの奏美は彼を少しだけ不安そうに見上げていたが故に。

鍵束は一階の幾つかの部屋を開いたが、精々護身用として使えなくはないかもしれない古びた武器や道具類が転がっているだけだった。しかし一階城門東の詰所だけは開かなかった。別の鍵が必要か、それとも扉の鍵自体が壊れているのだろうか？ 二人はその真実を深く考える暇もなく二階へ上り、こちらも巡回してはぐれた顔触れがいらないか探した。すると南側の通路より見慣れた背格好の男が現れた。

「ああ、葦杜、それに瀬之川ちゃんか！」

「坊之威さん！」

お互い最初は相手が偽物ではないかと云う懷疑を抱かないでもなかったが、やり取りをする限りは本物であると信じられた。兼輔は累を一階中庭に逃がした後追ってくる影を逃れて二階の南側の部屋に潜んでいたらしい。

「あれ、でも俺たちの方にもあいつは来ていたような……？」

「そうか？ ヤバい気配がこっちに近付いていると感じたからあの嬢ちゃん逃がしたんだがなあ。俺の気のせいだったのか……？」

「あの《黒い人型》がいきなり現れたからきつとわたしたち全員動転してたんだと思います。ひょっとしたら本当に二人いたのかも……」

いやそれは勘弁してくれと三人は思わざるを得なかった。ともかく兼輔に健らのことを伝えたとこる健らの元へ戻るまでは行動を共にした方が良いとして同行することになった。その後二階を一通り回り、念のため三階へと上ってこれを見回ったが、開けた空間には誰もおらず静寂に微風だけが吹き付けていた。どうやらこれ以上は誰もいなさそうだ。三人は結論付けて一階城門西の詰所へと戻っていった。

戻った先に集っていた面々と合流した頃には既に辺りは真つ暗になっていた。英一が愚痴を聞いた筈の紹と常人が終ぞ見つからず月子もどうなっているのか誰にも分からぬままだったがこの場においてはそれ以上の搜索に危険を冒すべきではないと考えられた。妙なものが入ってこない様に扉の鍵を閉め、健が食糧を配給する。残りの在庫から言って二日分が精々でありなくなる時点で時空間転移マシンの復旧が終わらない場合、また森に戻って食糧の調達と云うその日暮らしに逆戻りとなると云う。「だが現状のペースならいけると私は踏んでいる。不足している部品に関しては残り三つまで絞り込まれており、同時に未探索の箇所も限られているからだ」

健はこう言う。当然面々が半信半疑が精々なのを彼は分かっているらしく殊更自信に満ちた、力強い調子で語った。夜の内では最早ライトやランプの明かり抜きで活動することは難しい。かくして各々は眠りに就くことになった。疲れやすい女性陣が寝台に上げられ、男衆は適当に床で雑魚寝。健は扉を背にしようとしたが、英一は申し出てこれを代わった。一番年長の彼にそんな気の張る仕事はさせられないと。そう云うと今度は奏美が英一の心配をするのだが、彼は己の若さに任せて大見得を切った。明かりが消えて、部屋には寝息だけが聞かれた。英一も然して寝付けないうちに意識を休めんとした。……

この頃は良しきにつけ悪しきにつけ夢をよく見ると英一は思う。それは幼少期の情景だった。母の姿。おぼろげな、優しい眼差し。その母が日に日にお腹を大きくして行くのを見て、彼は妹が生まれるのだと思った。あの頃は妹だとか弟だとかそんなことを考えられるものではなかっただろう。父がいつもそんな母に寄り添っていた。幸福な家庭だった。……病院で、父は泣いていた。声を殺して泣いていた。その腕には新しい命があり、その背中には白い布で顔を隠された母の寝姿があった。難産故に妹を産んで間もなく母は死去したと英一は聞いている。彼自身はその場に立ち会ったか記憶は定かでなかった。或いはこの父の姿は、家に帰って来た時のものだったのかもしれないかった。

父の姿は消え、幼稚園の運動場が現れた。英一はあの頃ばーっとしていることが多かったと月子が言っていたのを覚えている。その月子がやって来て、何事か述べて彼の手を引いた。旧い記憶がどこまで真実なのか英一には峻別しかねた。記憶に無意識と願望が混交した得体の知れぬ何かを形成しているのではないかと思われるものだった。英一は立って、彼女に導かれるままに運動場へと赴いた。駆けっこをしていたかと思えばかくれんぼをし、屋内に入ってトランプで絵合わせをしていたり机に向かって折り紙や絵描きをしたりした。いつの間にかその傍らに少し大きくなって言葉を発し、解するようなになった頃の英一の妹、翼がいた。三人で、或いはもう誰とも言えない様な同じ組の子供らと

遊んでいた。母を喪った事実を理解せず、ただ母がもういないことへの悲しみを自らはこの中で癒して行けたのか。英一にとってその答えは永遠に忘却の彼方だった。

夕方の公園に英一はいた。翼はおらず、傍らに月子がいた。ああ、既に見たではないか。この後自分たちは奏美を見つけるのだ。そう思ったら確かにそこには幼い頃の彼女がいて、更にそこへ後ろから翼が駆けて来て奏美に飛びついたのだった。こんな風なものだったろうか？ その緩慢な懷疑が夕暮れに沈むように意識の内から抜けてゆく。四人は家路に就いた。奏美と、月子と別れて英一は翼と手を繋ぎながら家に帰った。まだ今より若い父が英一を叱る。翼は叱らず、優しい言葉で言い含めていた。そう、それがお兄ちゃんと云うものだから。実にそんな扱いの差を英一は子供心に不満に思ったことはあったものだ。けれど翼がにこにこして、また四人で遊ぼうと言いだせば英一は何もそうしたところを表に出すことなく、まだ異性の友達と遊ぶことに対する気恥ずかしさも乏しい年頃らしく素直に頷いていた。晴れやかな空が見えた。美しい青空。微かに畝を作る様な巻雲が彼方に浮かんでいる。

——おにいちちゃん。

後ろから、懐かしい声がした。翼の声は七歳の頃に聞いて以来ずっと記憶の中の存在だった。

——わたしが、おにいちちゃんをまもるから。

英一は振り返った。そこに立っていた翼の姿は記憶のままの姿をしていた。可愛らしいワンピースを着て子供向けのサンダルを履いた、おしゃまな女の子。その背中に黒々とした闇が口を開けていた。

——だからおにいちちゃんも、わたしをしんじてね？

闇が翼を、青空をも呑み込んでゆく。……英一に何が出来ると云うのだろうか？ ただの子供に。それでも彼は、夢の淵にて叫ぶ。危ない、と。

英一は目を覚ました。辺りは尚も真っ暗だった。夜明け前、と云うところだろうか。ただ寝息だけが聞こえるのも変わらない。ならばこのままじっとしているべきか……彼はそう思うのだが、そこで遠くから足音が聞こえて来る。それは段々こちらに近付いていた。

「……」

半ば衝動の様な、深い考えもないまま彼は静かに立ち上がり、得物の感触を確かめた上でゆっくりと扉を開いて廊下に出た。廊下に出た時、見覚えのあるワンピースがこの暗闇にあって視界の端に映った様に思われた。彼は淡々とした調子で懷からライトを取り出し、前方を照らす。照らされた光が西の曲がり角に達した時、やはり小さな後ろ足が彼の視界に捉えられた。ゆっくりと、曲がり角まで歩く。そこからライトを向けつつ北を見た時、足音の主が見えた。それは月子の姿をしていた。

「英、一……？」

疲れた声で呼び掛けられた英一はしかし、何も応じなかった。彼はその姿よりも先を歩いている少女の、翼の後ろ姿をこそ見ていたのだから。ただ黙って剣の柄に手を掛ける。

「ねえ、英一、どうしたの……？ 何か返事をしてよ。そこにいるんでしょ？」

のろのろと、それは近付いた。英一は相手を見ていなかった。ただじっと、それが間合いに踏み込んでくるのを待っていた。……飛び込む様に彼の後ろから声がした。

「英一くん！」

奏美がやって来て、彼のかざすライトの先を見る。それを見て奏美は一瞬安堵した顔をしたのだが、英一が固い無表情をしたまま廊下を見つめているのを見て不吉な予感を抱いたらしく彼に呼び掛ける。

「英一くん、月子ちゃんだよ、帰って来たんだよ。ねえ、聞いている？ 聞いているよね？」

「……」

「英一、あんた、何か、おかしくない……？」

既に翼は闇の内に姿を消していたが、英一にはその向こうで自分を待っている様に思われた。その為目目の前の存在が邪魔だとも。映り込む月子の姿はどこか怯えを伴って歩みを止めていた。奏美は気付けなかったが、その顔は微かに崩れていた。英一はどう云う訳か確信があった。そこに月子はいない、と。――停まった相手に英一は雄叫びの様な掛け声と共に剣を抜いて駆け、大上段にその剣を振り下ろした。真つ二つに、まるでゼラチンでも切る様な手応えがした。二つに割れたそれから飛沫が飛び散った。赤い飛沫が。……奏美が悲鳴を上げ、腰を抜かした。

「え、え、えい、いち、くん……何を、したの……？」

「偽物を斬った」

「あれは、あれは月子ちゃんだよ、偽物なんかじゃないよ！？」

英一は斬った相手を一瞥する。見事に両断された月子の死体らしきものがある。奏美は動転しているが故に気付いていないが、散った飛沫は既に黒ずんで溶けつつあった。見た目にはよく出来たそれに騙されている奏美を英一は見下ろす。その怯えと狂気への怖れを見て初めて、彼は過ちを認識した。慌てて彼は廊下の先を見た。既に翼は感じられなかった。

「……奏美、ええと」

「近付かないで！」

奏美が自ら、激しく退いた。もつれた足取りで距離を取り、その恐懼した表情を前に英一は言葉を失った。詰所へ逃げ込むその後姿を彼は追えなかった。扉が閉められ、鍵の掛かる音がした。……どんな言い訳をしても、本物の月子を連れて帰れねば奏美の心は閉ざされたままとなるだろう。英一は項垂れ、しかしこのままただ茫然としても意味がないと自らを叱咤し、翼が去った廊下を進んだ。廊下を北に抜けければ昇降階段がある。英一は地下へ降りようとした。そこでおもむろに手を引かれた。冷たい感触に誰かと思いいそれを見、言葉を失う。

「悪夢ハ続く、ソノ生ノ最果テマデ。サア、暗夜ヲ続ケヨウデハナイカ」

突然、辺りが変わった。何かに覆われる様にして英一は見知らぬところへ転移していた。仮面の骸骨はケタケタと嗤ってその手を放す。英一はそこで漸く少しだけ思考が回り、慌てて抜剣して相手に向き直った。

「お前、よくも……！」

「我ハタダソノ役目ニ忠実タルノミヨ。精々ソコニ愉シミヲ思イ抱クナレドナ」

「五月蠅い、俺の前に直接出てきたんだ、今度こそ思い知らせてやる！」

「呑気ナルコトデ我ハ心底悦バシイ。少シバカリナラ付キ合ウテヤロウゾ」

英一は踏み込んでその剣を袈裟斬りに振り下ろしたが、緩やかな動きでこれは避けられてしまう。仮面の骸骨は宙に浮いていた。剣を投げるかとも思ったがそれをして外した後がない。歯ざしりして彼は相手を睨みつけた。やはりそれにケタケタとした嗤いが、嘲笑が返ってくる。

「ソレダケデハ娯楽ニモナラヌ。我ガ降りテ来ネバ何モ出来ヌデ、王ニドウシテ太刀打チ叶オウカ？」

「王だって？」

「王ナドト言エド、タダノナレノ果テニ過ギヌモノデハアルガ。オマエノ仲間共ガ探シ求メルハコレヲ退ケズシテ得ルコトハ無理ナコト」

「またこつちを煽動してくれるのか……！」

「我が嘘ヲ教エタコトハ？」

「五月蠅い！」

「フフフ……何モ知ラヌ憐レナ生者ヨ。自ラノ宿命ニ抗イ、ソノ為ニ矢尽キ刀折レテ総テヲ呪詛シナガラ果テル定メヲ背負ウ者ヨ」

「……」

「オヤ、モウ文句モ尽キタルカ？　然ラバ、歩ムガヨイ。悪夢ノ続キヲ。我ハ道化トシテ導イテヤロウゾ」

仮面の骸骨はそこまで言つてケタケタと嗤い、闇に溶けるようにして消えてゆく。しかし消える間際、思い出したように告げる。

「ソウソウ、オマエノ仲間ラハ悪夢ガ顕現ニ呼ビ名ヲ与エテイタナ？　ナレバ同ジク悪夢ヨリ出デタル我モ名乗ウテヤロウ。遠キ昔ニ誹レタモノヨ……《悪夢憑き》ト」

半分だけ宙に残っていた仮面がそう言い終えると間もなく闇に消える。……英一は辺りを見回した。既に何の気配もない。完全に取り残されたらしい。やり場のない感情を抱えた彼は剣を納めて周囲を観察した。小なりなドームの様な石造りの空間で、壁に蒼白い炎を灯す蠟燭が吊るされていた。その燃え尽きぬところの理由を考えても仕方がなかった。英一は少なくとも視界の先に進めそうな通路があるのを認め、歩き出す。何が待ち受けているのか分からぬにしろ、ここから抜け出して城に戻らねば。

「戻つて……どうするんだ？」

ふと英一に弱気が押し寄せた。奏美の恐懼を思い出す。あの本能的な拒絶。子供の頃から一緒だった友達が、同じく子供の頃から一緒だった親友を真つ二つにするのを目の当たりにしたなら誰だつてショックを受けもするだろう。同時に斬った本人、英一の正気を最早信じることは叶わぬだろう。あれが偽物だったと証明出来れば話は別なのだろうが……。英一は迷いながら歩みを進めた。廊下にも蠟燭が灯っており足元を見失う心配だけはなさそうだと思われた。歩き続け、また開けた空間に出た。そこを見回して彼はふと気づく。何か描かれている様に見える。英一は壁に近付いてこれを観察した。蠟燭の明かりで足りないならライトを点ける。……そこに描かれていたのは円形の壁一面を使った壁画だった。奇怪な筆致で描かれた人々が光を持つ者に先導されて山の頂上に立つ絵。見上げた天井には二つの太陽と二つの月、そしてそれに囲まれた神々しくも謎めいた髭の老人だった。英一にそうしたものを理解する教養は欠けていたが、それでも彼はこれを見て教科書に出て来る西洋美術の宗教画を思い浮かべ、それに類するものではないかと考えた。

次の部屋に進むとまた別の壁画が見られた。それは人々が働き、街々が築かれ黄金が集う絵であった。天井には髭の老人は雲に隠れて下を見る様に描かれている。また更に廊下を進み、出た先の部屋には戦争らしき景色が描かれていた。多くの人々が武器を携え、攻め寄せる敵へと勇ましく向かってゆく。空の老人は両の腕を広げてさながら祝福の言葉を述べているかの様だった。また次の部屋は空が赤く塗られていた。地には多くの屍が転がり、栄華を誇った城郭も傷ついていたがそれでもまだ生き残った人々は悲しみながらも立ち上がりうとしていた。髭の老人は慈悲を宿した悲しげな顔をして人々を見下ろしている。……最後に行き着いた部屋は凸凹だった。壁面は三分の二程度までしか整形されておらず、絵もどこか下書きの部分ばかりに見える。ただ、一つだけ明確に描き込まれた絵画があった。それは城で、黒と紫の霧が辺りに広がってゆく様が描かれていた。その霧の内には幾つもの髑髏が覗かれた。

「うん？」

英一は足元に屍が転がっているのに気付いた。その手に古びた鑿が握られ、またその周囲に刷毛や筆が転がっている。それで理解せざるを得なかった。これは完成される前に造り手が力尽きたのだと。

ここには歴史が描かれているのだと。栄光とその行き着いた先を記録する前に死に至ったこの者に対し、英一は哀悼を禁じえなかった。名も顔も知らぬ相手の為に、彼は黙祷を捧げた。

「しかし……ここからどう出ればいいんだろう」

部屋はここで行き止まりである。各部屋には通路のほかに左右石の扉らしきものが存在したが、英一の力で開けるものではなく持つている鍵束など当然意味をなさなかった。思案に暮れた英一だが、唐突に背中に悪寒を感じた。まさか、化け物に背中を取られたか？ 彼はぱつと振り向いた。

「……え？」

そこには黒い靄が浮いていて、その靄から人が生えていた。生えていたのは慎一郎にしか見えなかった。

「い、委員長、いや、和家！？」

「う……あ、葦杜……？」

ひどく衰弱している様だが、まだ意識はあるらしい。初日に行方不明になって以来どうなっていたのか全く不明だったこの男だが、このままにはしておけないだろうと英一は慎一郎を助けるべくその靄に手をつ込んだ。しかし突っ込んだ手は空を掠める様に何の手応えも得られない。首元から上だけ生えている慎一郎はここにはいないのか？ 英一は恐る恐るその首筋を触った。そこには確かに人間の肉の感触、人間のぬくもりがした。

「なに……すんだよ……、くすぐ、ったい……」

「え、ああ、ごめん、本当にそこにいるのかと思って」

「訳、分から、……。あし、もり……」

「何だ？」

「なあ……ちがたけ、さん、無事……？」

何でこの期に及んでと英一は一瞬思った。しかしふと京典が、当人に打ち明けることの出来なかった小春への好意を抱いていたことを思い出す。それと同じことなのか？ 英一はそう考えてしまうと言葉に詰まった。その様子を慎一郎は不審そうに彼を見上げる。

「おい、葦杜……聞こえ、なかった？ 千ヶ嶽さん、どうなってる、の？」

「あ、ええと……」

「なあ……目え逸らすなよ……無事、なんだろう……？」

おためごかしを英一は考えたものだ。この衰弱した慎一郎を今この場限り安心させるために百香は無事だと嘘を吐くことを。京典の時は事実をそのままに打ち明けて相手を感情的にさせてしまったものだから、落ちて着くまでは安心出来る様にそう云うことにしておこうと。……だがそこで英一の真つ当な良心が真つ向からこれを拒絶するのである。そんな不実な真似は出来ない。それに京典も一度は離別したが後で取り合えず和解ならずとも受け入れてはくれたではないか。慎一郎も時間は掛かれど必ず呑み込んでくれる筈だと。

「千ヶ嶽さんだけど……」

「あ……？」

「……」

「どう、した……？」

「……死んで、しまったよ。助けられなかった」

もしかしたらその告白はさながら懺悔の様でさえあったかもしれない。百香を助けられなかったと云う罪、背負った業。それを抱え、あまつさえ誰かにその事実を偽って生きると云うことに英一の心は耐えかねると無自覚に理解していたのかもしれない。……だがそれは相手の寛容さをこそ待む行いに他ならない。英一はその一言を告げるとき目を瞑って祈るように告げたのだが、それから暫く沈黙が続いた。彼はいたたまれなくなって目を開けようとした。

「おいッ!？」

がっと思一郎が、どこから生やしたのかと云うべきその両腕を靄から突き出して彼の襟首を掴んだ。見れば彼の顔は涙と鼻水に濡れてぐしゃぐしゃになっていた。

「うそ、うそを……嘘を言うな!! 千ヶ嶽さんは、生きてる、そうじゃないのかよ!？」

「っ、嘘じゃない、本当だ、俺の目の前で化け物に喰われたんだ!」

「ふざけ、ふざけるな、ふざけんあああああッ!!」

投げ捨てる様に英一を解き放った慎一郎は顔を覆って絶叫した。狭い空間に彼の悲嘆が鳴り響いた。耳鳴りがするようなその声に英一は怯え、また耳を塞いだ。目をも塞ぎたかったが覆し得ない事実を告げたことよって自らが更に罪を負った様な感覚を抱く彼はその姿から目を離せなかった。段々慎一郎を覆う靄が広く大きくなってゆく。それは彼を覆いつくそうとしていることに気付いた英一は慌てて立ち上がり、彼を引き出そうと腕を掴んだが拒絶された。

「放せ、クソ野郎ッ!!」

「和家、ヤバイよ! は、早く逃げないと!」

「うるせえ、うるせえ、うるせええええッ!!! ああああああああッ!!!!」

膨らみ続ける靄と絶叫に恐れをなした英一は逃げ出した。剣の重みは目の前に何か立ちはだかった時に縋る最後の抛り所とさえ思われた。英一は元来た道をひたすらに走り、最初の部屋の先にまた石の扉が閉まっているのを目にした。しかし俄かに罅割れている。彼は自らも絶叫しながら、普通ならまずそんな判断はしないであろう体当たりを叩きつけた。石の扉はそれで呆気なく碎け、彼は真つ暗闇の通路へと飛び込んだ。しかし背後から響く、徐々に歪み始めているかにも聞こえる絶叫になお恐怖を煽られた英一は痛みも忘れて通路を走った。光も何もない通路。ひたむきに走った時、ぞくりとした感覚を背後に覚えた。覚えたと思った直後には首を掴まれた。

「!!!」

「ヨクゾヤツテクレタ。デハ、ココへ連レテ来タ信義トシテ帰シテヤロウゾ。逃ゲ惑イ、煩悶シ、更ナル絶望ヲ竈ニクベヨ。ソウシテ……オマエモ、悪夢ソノモノヘト成リ果テルガヨイ」